～ 巻 頭 言 ～

デジタル型法整備支援かアナログ型法整備支援か

―　レギスタン広場の風に当たれば―

大阪大学大学院教授　　池　田　辰　夫

夏のレギスタン広場には，ヤヌスのごとき二つの顔がある。

それにしても暑い。とにかく暑い。日差しが痛い。汗も吹き出す。炎熱地獄といったおもむきである。ところが，日陰ともなると別世界なのである。涼しささえ感じられる。乾いた風が肌に心地よい。オアシスそのものである。そこに佇み，どこからともなくやってくる風に当たれば，ふとある妄想がふくらむのだった　―　この情報家電の世の中でアナログがデジタルに勝てるのだろうか。

歴史に，もしもはないのだけれども，明治ニッポンのあのボアソナードが今日に生きていたら。そうした思いにとりつかれてしまう。ナポレオン民法典から２００年の今年。おそらく，今頃は，専用ジェット機を乗り回して，昨日はカンボジア，今日はインドネシア，そして明日はモンゴルなどと，忙しく飛び回っているに違いない。自然法で理路整然と構築された自前の電子データをひっさげて。各国の実情に合わせ，多少の修正くらいは，彼の能力を持ってすれば，いともたやすい。ちょうど将棋や囲碁，チェスなどの世界で，一人の名人が多数の対戦相手の盤面をかろやかにこなしていく，あれである。これをデジタル型法整備支援と呼ぶことにする。その長所は速い，旨い，簡単，そしてトータルコストの低廉さにある。ではデジタル型に短所はないのか。きっとあるはずである。

再び，明治ニッポン。鉄道・造船・鉱山開発から芸術に至るまで欧米の先進技術を貪るように吸収したその時代の中に，人生の円熟期にさしかかりつつあるボアソナードはいた。当年４８歳。知的水準の高さを示す幅広の額，意志の強さを象徴するやや大きめの筋の通った鼻先。にじみ，そしてほんのりと浮き上がってくる汗。今の有楽町駅にほど近いところにあった司法省明法寮（後に法学校）の一室。学生を前にして熱っぽく講義をしている。長旅の疲れも癒えた明治７年４月のことである。ときには脱線しながらも，蘊蓄をおしみなく披露する。弟子たちが期待に応えて，すさまじいスピードで彼の口述を必死に筆記していく。それもみごとなフランス語で。これこそアナログ型法整備支援と呼ぶにふさわしい。その後，

いわゆる「法典論争」のあおりを受け，彼は失意のうちに横浜港からフランスに帰ったとされる。星霜２１年を越えていた。その落胆ぶりは想像にあまりある。愛する家族をパリに残し，全身全霊で打ち込んできたその結果がこれである。だが，彼の蒔いた種ははやくも収穫期を迎えていた。弟子が育った。日本で初めての彼の本格的な法学教育により多くの人材が輩出する。例えば，弟子の一人である加太邦憲は，４年間の欧州留学を経て，帰朝の翌年（明治２４年），４３歳で京都大学（京都第３高等中学校）法学部の立ち上げをまかされつつ，京都地裁所長に赴任する。また，今日の日本の研究者にもボアソナードシンパは少なくない。心血を注いだボアソナード民法草案などは，バイブルの感覚に近いものがある。それほどに時空を超えた絶大な影響力を誇る。彼はそうした偉大な成果をも残したのだった。あるいは，現在の日本の法制度の運用にさえも，彼の功績が見られるかもしれない。

それはなぜか。

人は苦しみのプロセスを共有するからこそ，その成果に大きな価値を与える。法整備支援は相手国との作業プロセスを共有し，ゴールをめざす双方のモチベーションを高めてこそ，実り多いものとなるはずである。法制度はつまるところ担い手による運用によって，始めてその姿を現す。デジタル型法整備支援では，おそらく人は育たないであろう。実務は全く動かない。手間も時間もコストもかかるアナログ型であればこそ，魂が吹き込まれる命も与えられる。制度が真に根付くということは，まさにそういうことなのだ。

こうしたアナログ型法整備支援は，そうすると多くの方々のまごころの積み重ねであるに違いない。また何よりも，ハコモノ支援とは大きく異なり，完成後直ちに劣化を開始することがない。たしかに，完成した法典を時代のニーズに合わせる形で不断に見直す必要はあるし，労苦をともにした人々の命には限りもある。だが，そこで生み出された限りない叡智は世代を超えて確実に継承されていくはずである。永遠の命が生まれる。そして，ともに学ぶ中で，冷静な議論を文化として定着させることは，着実に社会に，そして国家に，国際間に平和を形成していくはずである。また，そうでなければならない。まごころは世界の共通語なのだから。

レギスタン広場では今日も伝統の技が繰り広げられる。暑く眩しい日差しのなかでのあざやかな手つきによる妖しげな日銭稼ぎと時を同じくして，ひんやりとした薄暗い室内には粛々とした営みがある。目映いばかりの光沢を放つ職人芸によるシルクの絨毯は，それ一つでときには一家の数年分の生計をもまかなうという。機の前でこつこつと地味に労苦を積み上げる手作業だからこそ，織りなす色合いに力が生まれる。実際，その力は，人々の生活の中で何世代にもわたって使われ込み，そうして次世代に引き継がれてきているという事実によって確かに証明されてきた。

サマルカンドの澄み切った空気のなか，丸屋根のブルーが，そこぬけに青い天空に映える。チムールがさらに築き，磨き上げた，妖しいまでの響きの名を持つシルクロードきってのこ

の巨大都市。今まさに，観光を基軸として市場経済の波をしっかりとまたしたたかに乗り切ろうとしているのだった。

レギスタン広場